

定年俳句誌

7 2012年
月 号

かきね



黒羽集

(七)

佐藤喜仙

梅の郷街路樹もまた梅香る

橋上より見る多摩川の雪解水

紅梅の吉野街道軒端まで

村の子等梅見客にもこんにちは



梅五分の樹下に満開福寿草

犬ふぐり梅に光をはねてをり

日向にはほふけてをりし露の臺

梅園の隅々に小さき節分草

梅の香にむせてジャスミンティーを飲む

梅林の奥より微か初音聞く

かきね集

白選句集



花曇り

松本周二

鳥の声遠く聞こゆる花曇り

花疲れほの甘き香の茶を点てる

ひともとの野道の先は花の家

和ませて眠りさそふや諸葛菜

つかの間の光を拾ふ柿若葉

メビウスの帯のごとくに初燕

鳥の巢

耕の真つ只中へ郵便車
藤房の揺れて離れてまんだら寺
礁打つ波の序破急大南風
田を植ゑて田の面に淡き苗の影
遠景も近景も花吉野山
ハンガーの針金見ゆる鳥の巢

古川千鶴

三社祭

家族のみ静かに酌める花の宴
花巡り墨田上野と繰り出しぬ
放射能検査の後に新茶摘む
まわりにも風を起こして滝しぶき
愛求め囁りしげく枝移り
きびきびと三社祭の女子衆

安藤虎酔

鈴懸の肌

花吹雪口あく鯉にやる餌なく
鈴懸の肌触るる手に夏の蝶
渡し舟待つ間に魚はね夏めきぬ
山吹や一服の茶に憩ふ亭
一打ちの鍬の重たき筍掘り
花散りて斑景色の御苑かな

川井素山

風薫

花嫁を乗せる川舟風薫る
鳳来寺今宵も鳴くや木葉木菟
外国の釣鬚印籠浴衣がけ
箱釣の吾子の眼差し瞬かず
風鈴の音色に映る市の景
風薫る木曾路は全て山の中

菅原 孟

いのち

木島茶筌子

若人の生命桜花と讃へし日

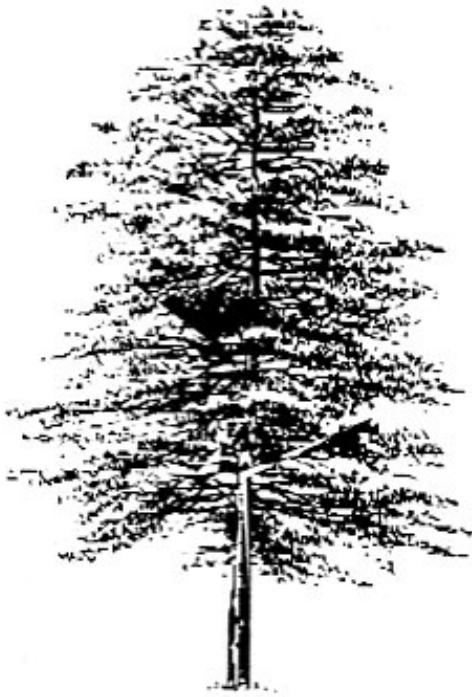
紫の花数多見る立夏かな

武具持たぬ人形が好き柏餅

若竹やぴんぴんころりてふ造語

あの頃も生めよ殖せよ鯉のぼり

早苗饗やアルコール零の缶の立つ



撫子集

主宰選



夏めくや椀に浮かびし山椒の葉

米田文彦

初夏や鳥居を隠す大木立

葉桜や十三回忌の案内受く

雷鳴の去りて雀の枝移り

雷鳴の後の静寂坂の町

春の蛇池泳ぎきりとぐる巻く

本郷宗祥

マンションの窓には小さな鯉幟

一株のサルビア庭を照らしをり

池に渡し風にはためく鯉幟

雨に濡れ新緑さらに青みたる

海ぶだうぷちぷちと昭和の日 岡野安雅

春霞飛行機雲の海に果つ

急峻な棚田に聞ゆ田植歌

四万十の川面を照らしシラス漁

松蟬やエースの背中激励し

峽の宿楯の崩れて部屋に散る

天泣の空のすがしく鳥帰る

とまり木てふ居所のありて鳥雲に

春浅し頬刺す風のいづこより

春灯のちらほら見ゆる散居村

半眼の駱駝の睫毛夏嵐

碧海に航跡白く夏立ちぬ

山の端を墨絵ぼかしの五月闇

畑中の農夫呑み込む麦の波

民宿に筍飯の夕餉膳

小池清司

沈丁花門毎の香や雨の夜

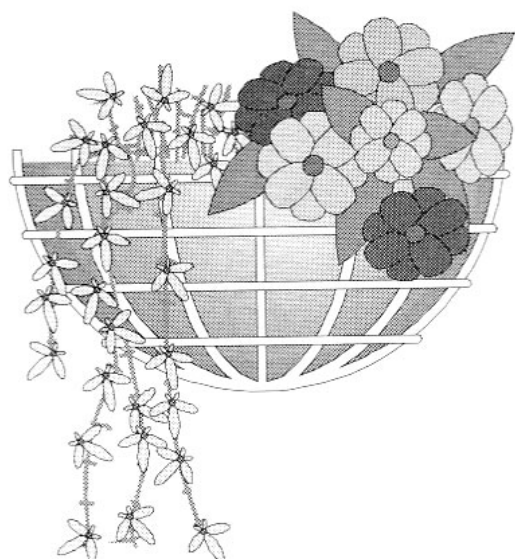
田島昭久

椿園花高く咲く藪椿

掻い掘りのあと蛙見る古き池

道までもしだれ今年も梅の咲く

外人も足を止めたる木五倍子かな



那須野集

主宰選



春曉に海猫浮かぶ地震の海

丸山酔宵子

城下町藻の花ゆれし濠の内

吉田啓悟

輪を描かくトンビ飛びこす熱気球

五月晴れアルプス望む天守閣

槻若葉天にむかつて輝けり

掻き曇り雷鳴近き昼下がり

軒の先ひかる夕日に鯉幟

夏霧に濡れた畦道稲ひかる

洋館に春の落葉のとぎれなく

廃屋に凜と咲きをり桐の花

青木英林

フルートの息つぎの音夏館

友逝くや武州は梅雨の最中なり

山里に人目を避けて山法師

羅や銀座通りに店新た

ローカル線駅の広場に鯉幟

母の忌や薫風に背をおされけり

牡丹のあまりに短き盛りかな

石窟に阿弥陀立像岩灼くる

里山の畔に筍顔を出し

病室の窓より見ゆる夾竹桃

修行僧座禪は眠し花南瓜

松本信子

短夜を惜しむごと赤き星低く

池内とほる

水葵紫紺の花を高々と

茄子漬の紺濃かりけり朝餉の膳

戦さ後時が消しさる夏木立

滴りのその一滴の重みかな

梅雨空を討ち払ふかに夾竹桃

ほととぎす高音に山家の内閑か

一匙で脳にひびきしかき氷

百合蕊に花粉纏うて虫の来る

みちのくの青田ぬく風水車踏む

坂上じゅん

行く道も戻る道とて朧かな

柳田皓一

雲の嶺漂泊の想ひ止み難し

梅雨寒や五百羅漢に五百の顔

ひらひらと過ぎるものあり初蝶なり

燕来る被災の地にも行きたもれ

へりコプター基地に迷彩梅雨寒し

雀の子恐れを知らずはね廻り

五月晴れ泡に口つけてビールかな

深酔ひの帰宅の道の沈丁花

橋本修平

絶巔の雪消え去るや明易し

松田利秋

声そつと掛けたき一人静かな

さがしたる一人静は森の奥

前を行く坊さんの手の夏大根

眼に染むる青葉若葉の木陰道

舟で行く潮来花嫁風涼し

電線を撓めて並ぶ夏燕

谷川岳青嶺の先になほ青嶺

七十の翁となれど母の日や

長島清山

風を受け鯉幟泳ぐ川の上

菊地崇之

柏餅食つて向かへるパソコンに

仰山な葉をつけてをり夏木立

早朝の新聞受けに初夏の風

常のごと愚痴をこぼして妻に夏

遅桜水面を覆ふ散り模様

いぬふぐり立ち止まり見て目を癒す

花園に山吹の色の鮮やかに

杉林の傍へにひそと咲く椿

山笑ふ火入れ待たるる登り窯

後藤克彦

霾や煙を吐かぬ煙突群

郡山真帆

逆さ鉢底の穴から雀の子

古伊万里に富貴漂ふ白牡丹

里山の茂れる枝に毛虫這ふ

風絡み喧嘩のごとし鯉幟

鍬を打つ音遅くまで花大根

み仏の花とも思ふ牡丹かな

石楠花の蕾に雨のやはらかし

老鶯の鳴きて山道ひと休み

水ひかるお濠に映ゆる桜かな

吉田博行

夜桜の提灯ともり風に揺るる

陽光や紅の芽を吹くかなめ垣

春の雨庭の緑も増しにけり

喘ぎつつ登る山道青葉かな

撫子集・那須野集鑑賞 五月号より

客員 村上克哉

撫子集

春昼や額に眼鏡置き忘れ

小池清司

晴れた春の日中はのどかで眠気を催すのんびりとした一時、気温の上昇した晩春の長閑な気分。季語春昼は「大正以降使われるようになり、日差しのまぶしさや暖かさが季節感を明確にしている」と片山由美子氏が解説している。高齢になると物忘れが多くなる、一つのことの途中で他のことに手を出すと、始めのことが疎かになり中断したままになりする。特に老眼鏡は各部屋にスペアを置く人も多いが、揚句は春昼の長閑さが平明に表現され可笑しさもあり微笑ましい。

冬麗や日の斑のをどる濠の水

林美登里

寒い日が続いたあとにはよく晴れて穏やかな日が出てくる。春の麗らかさに例えて「冬麗」と言う。からりと晴れた日に、お濠の水面が折からの季節風に波立ち、七色に反射している情景がよく伺え綺麗に纏められた。

すべやかに水尾引く鳥ののどかなり 本郷宗祥

水尾引く鳥だから水鳥であろう、秋に渡ってきて冬を越し、春帰ってゆく。水鳥は冬の間雄が美しい羽になるものが多い。すべすべとなめらかに水尾を引くのは鴨か、鳩か鴛鴦、白鳥、鷗か、清少納言が書いたように夫婦仲のよい鴛鴦かも知れない。

(以下略)

伝言板

1 第七回本部句会 (原則第二金曜日)

①日時 2012年7月13日(金)

14:00～17:00

②場所 目黒区「下目黒住区センター」

3階会議室 (別添地図参照)

③投句 当季雑詠 5句

④会費 1000円

2 第八回本部句会

①日時 2012年8月10日(金)

14:00～17:00

その他事項は第七回と同じ

3 吟行 (2012年度吟行方針)

毎月同じ場所を吟行し、日本の四季の微妙な変化を認識する。なお今年度は吟行後の句会は行わない。

①第七回吟行 (原則第四火曜日)

日時 2012年7月24日(火)

13:30～15:30位

場所 新宿御苑

集合 新宿御苑正門前

入場料 各自負担 200円

②第八回吟行

日時 2012年8月28日(火)

13:30～15:30位

その他事項は第七回と同じ



4 「かさね」友の会の皆さん

投句をされる時、裏面に「友の会の声」

欄がございますので、句評、近況報告、ご意見などご自由にお寄せください。なお友の会の皆さんは特別作品(十句)、随筆、その他論文等をいつでも投稿することができます。お待ちいたしております。

会員募集

何時からでも「かさねの友」になれます。

年会費 12000円(前納)

ただし年次途中入会者は入会申し出の翌月より12月まで月割りで納付

見本誌 四百円(切手可)

見本誌請求先

15210033

東京都目黒区大岡山2-17-15

かさね俳句会 佐藤喜仙

「かさね」俳句の基本

I 前提

- 一、俳句は世界最短の「詩」である。
- 二、有季・定型・文語体を旨とする。

① 「詩」とは

水原秋櫻子が俳誌「馬酔木」の昭和六年（一九三一年）十月号に載せた「自然の真と芸術上の真」より抜粋

「ただ自然の真だけを追求したところで詩人たる資格はない。心を養い、主観を通して見たものこそ文芸上の真で、これを尊ぶ人が詩人である」

② 有季の原則

原則①

「季語とは累々と先達が磨いてきた季節を表す言語群であり、歳時記により集大成されている」

原則②

「季語が一句の中で使われ、その句の季節を明確に表出する時、その季語を『表季語』と称する」

原則③

「一年を通して存在する現象、あるいは事物が季を定められている語彙の場合、その定められた以外の季節においてはその語彙は季語とは見做さない」

原則④

「季重なりとは同季に属する季語を一句の中で二語以上重ねて使用する場合をいう」

原則⑤

「例えば絵・版画・掛け軸・屏風・襖絵等に描かれた、通常季語と見做される花鳥等は、季感がないので季語とはみなさない。同様比喩に使われている通常は季語である語群もやはり季感が無きがゆえに、季語とはみなさない」

③

文語体について

俳句は韻文であることを守るため文語を使用し、用言においては歴史的仮名遣いを必ず使用することとする。

II 俳句の約束事

一、切れ字（十八字）を使い俳句にメリハリをつける。

現在切れ字とされている文字は、や、かな、けり、もがな、し、ぞ、か、よ、せ、れ、つ、ぬ、へ、す、いかに、じ、け、けん。

二、表現

主観を直接表現せず、具象表現を使うことにより、自分がその一句の中で言いたい主観を暗示の形で言い表す。

三、地名・固有名詞

地名・固有名詞は一句の中にあつて季語に次ぐ重要な働きをするが、一句の中で使用する時は少なくとも大方の俳人が知っているであろう地名・固有名詞にとどめる。

四、三段切

形は三段切でも言わんとする内容が繋がって居れば良しとする。

例 完全な三段切

奈良七重七堂伽藍八重桜

芭蕉

三段切でも可

初蝶来何色と問ふ黄と答ふ

虚子

五、前書・ルビ

前書は慶弔の句にのみゆるされる。ルビは誌中では使用しない。

III

俳句の作り方……山口誓子

私の俳句の作り方を、図式で現せば、至極簡単である。感動が先立たねばならぬ。事物と出会って思わず「ああ」と叫ぶその叫びから、俳句は生まれるのである。